

JCA NEWS



Japan Communication Association (JCA) Newsletter

日本コミュニケーション学会ニュースレター



CONTENTS

1. 巻頭言	1	6. 広報局便り	17
2. 私にとってコミュニケーション学とは	3	7. 支部ニュース	19
3. 2023年度 第2回理事会報告	6	8. マイページ登録のお願い	23
4. 学術局からのお知らせ	14	9. 編集後記	23
5. 事務局報告	15			

135
2024.2

巻頭言

学問としてのコミュニケーション

日本コミュニケーション学会中部支部長

毛利 雅子 (名古屋市立大学大学院人間文化研究科教授)

日本コミュニケーション学会で活動するようになって、もう何年経つのだろうか。長くもあり、あっという間でもあり、さまざまなことがあったように思う。

そもそも、私がコミュニケーション学に関心を抱いたのは、長らく会議通訳者・司法通訳者として活動していたことがきっかけだった。欧州では通訳学という研究分野が確立され、言語学やコミュニケーション学を含み、包括的に通訳を研究する地盤が築かれているが、日本ではまだまだ実務としての側面が強く扱われ、アカデミックに研究するという環境への途上でもあったことが背景にある。

長く通訳者として稼働していく中で、非常に通訳が上手いきその後のコミュニケーションがスムーズになることもあれば、思わぬ発言などに遭遇し、その後の関係がぎくしゃくしてしまうことも数々経験してきた。加えて、倫理的問題に直面することもままあったが、それも明確なガイドラインやルールもなく、通訳者個人の倫理観に負うところが多かった。更には、リーマンショックの影響を受け、日本で唯一存在していた通訳技能検定試験は実施団体が倒産するという顛末で、日本における会議通訳者をめぐる環境は決して良好ではなかったこともあり、通訳者の立場や通訳技能、加えて倫理規定など考えさせられることが続いた時期があった。

しかし、例として通訳技能の面を考えても、それを全て「実務として処理」するだけでは次に繋がらない。何よりも、なぜ上手くいったのか、なぜ上手くいかなかったのかという根本的な原因を実例や証明を用



いて科学的に探らなければ次に繋がらない。しかし当時の状況では何ら検証することも叶わず、次のステップには進めないことに焦りと苛立ちを感じていた。私自身が通訳の専門学校で勉強していた時にも、「通訳が上手くなるには練習・勉強・経験」と言われるだけで、どうしたらそれが効率的に進められるのかという理論的な講義はなかったことにも疑問を抱いていたし、通訳を教える側になっても合理的・科学的な説明が出来ない自分に納得出来ず、思い悩むことも多くなった。

そんな時、かつての恩師の勧めもあり、私は日本コミュニケーション学会に入会することになった。そもそも私はイギリス文学を専門としていたこともあり、コミュニケーションは門外漢だったが、学会に参加するようになり、コミュニケーション学と通訳研究を結び、研究を進めていこうと考えるようになった。

研究者としては非常に遅いスタートとなったが、私とコミュニケーション学との関わりはここから一気に加速することとなった。

実務経験とアカデミズムを包括的に捉える研究をという指導のもと、なんとか博士論文を書き終え、その後は通訳者としての活動を継続しつつ、ある種の「二足の草鞋」で研究者に転じた…と書くと、それなりに体裁は整うであろうが、実際の研究はまだまだ試行錯誤が続いている。いや、むしろ研究課題が次々と見つか、果てしない旅に出てしまったという方が正しいかもしれない。

コミュニケーションと簡単に言うが、コミュニケーションを取るのは難しい。コミュニケーション学も難しい。追及すればするほど、どんどん手の届かない彼方に行ってしまうように思われる。それを追い求めることが、研究者の姿勢でもあるだろうが、私は到着地のない長い旅路を歩いているようだ。しかし、風景が常が変わっていくことが楽しく、どんどん追い求めてしまう。この道程を歩き続けることで、いつか学問としてのコミュニケーションに寄り添える日が来ることを祈りながら、試行錯誤の日々は続いていく。

私にとってコミュニケーション学とは



師岡 淳也（立教大学）

コミュニケーション学との出会いは、1990年代前半、大学の英語会（English Speaking Society）でディベートに熱中していた頃にさかのぼる。ディベート活動を通して、鈴木健さんや青沼智さんなど、米国の大学院でスピーチやディベートを教えながら、コミュニケーションを学んでいる卒業生と知り合い、定期的に指導を受ける機会にも恵まれた。3年次も半ばを過ぎ、就職活動を始めると後ろ向きだった私にとって、卒業後もディベートに関わりながら、コミュニケーションの学位を取得するという選択肢は非常に魅力的にうつった。当時はインターネット普及前で海外の大学院に関する情報も限られていたが、大妻女子大学から異動されたばかりの石井敏先生の授業を受けたこともあり、スピーチコミュニケーション学には様々な研究領域やテーマがあり、その中にはスピーチやディベートも含まれること、スピーチコミュニケーション学の源流には古代ギリシアのレトリック実践や理論があることは何となく理解していた。

このように、当初は「スピーチコミュニケーション学=私にとってのコミュニケーション学」であったため、留学してしばらく経ってから、スピーチコミュニケーションという名称がスピーチ研究者とコミュ

ニケーション研究者の対立の末の妥協の産物だと知ったときはかなりの驚きであったし、単線的な学問史の語り疑問をもつようにもなった。20世紀半ばの「スピーチ/レトリック対コミュニケーション」という対立図式は、異なる研究パラダイムの衝突や組織内の主導権争いといった面もあるが、「(良い) コミュニケーションとは何か」という問いに対する見解の相違にも起因するようと思われる。例えば、International Communication Association の前身にあたる National Society for the Study of Communication は1950年の設立当初、導入教育としての「コミュニケーション科目 (Communication Courses)」の普及に熱心に取り組んでいたが、そこで重視されたのは、意見を簡潔に分かりやすく伝える力や情報を正確に理解する力であった。つまり、レトリック的技法を極力廃したコミュニケーションスキルの育成を謳うことで、当時主流だったスピーチ科目との差別化を図ったのである。

コミュニケーション学と一口にいっても、Waisbord (2019) が “Divided by communication” (*1) と表現するように、領域によって——しばしば領域内でも——コミュニケーションの見方は異なり、統一的な定義や中心的な理論がある訳ではない。法学の分野では「法律的なものの考え方」や「法的議論の仕方」といった言葉がしばしば使われるが、コミュニケーション学に通底する「コミュニケーション的なものの考え方や議論の仕方」を想定することは難しいだろう。それはコミュニケーション学が元来「ポストディシプリン」的な特徴 (Waisbord, 2019) をもっているからだろうし、私自身、そうした非境界的で異種混交的なコミュニケーション学のあり方に魅力を感じている。問題があるとすれば、コミュニケーション学においてコミュニケーションの共通理解が欠けていることではなく、それが領域間の対話の回路を閉ざしてしまうことであろう。他の学問分野と同様、コミュニケーション学も専門化と細分化が進んでいるが、それぞれの領域の前提となるコミュニケーション観については、領域を越えて語ることもできるだろうし、そうした対話を続けることで、お互いのコミュニケーションの見方を豊かにすることができるのではないか。

こうした思いを特に強くもつようになったのは、博士論文の指導教員である Peter Simonson の誘いで、*the International History of Communication Study* (*2) に日本のレトリック史に関する章を寄稿したことがキッカケである。同書では、米国や西欧だけでなく、クロアチアやブラジル、イスラエル、インドなど非西欧圏におけるコミュニケーション学の歴史が綴られているが、これらの章を読むと、非西欧諸国において、コミュニケーション学が欧米のコミュニケーション理論や方法論の影響を受けつつも独自の

展開を見せていることが分かる。同時に、これまでコミュニケーション学の西欧中心主義を問題視しつつも、西欧（とりわけ非英語圏）におけるコミュニケーション学について十分な知識を持ち合わせていないことも思い知らされた。同書の刊行後、いろいろな国や地域のコミュニケーション研究者やメディア研究者と交流し、お互いの専門分野について話をする機会が増えたが、こうした交流が、「私以外にとってのコミュニケーション学」についての知見を深めるとともに、「私にとってのコミュニケーション学」の幅を広げることに役立っている。

注

*1 Waisbord, S. R. (2019). *Communication: A post-discipline*. Cambridge: Polity Press.

*2 Simonson, P. & Park, D. W. (Eds.). (2015). *The international history of communication study*. New York, NY: Routledge.

2023 年度 第2回理事会報告

日 時：2023年10月7日(土) 13時～15時40分

会 場：オンラインでの開催

参加者 (敬称略)：15名

守崎、高永、松島、小西、日高、内藤、松本、宮崎、高井、宮原、佐々木(代理)、會澤、毛利、谷口、清宮

欠席者 (敬称略)：小山、今井、五島、水島(代理：佐々木)、田島、宮脇、脇

議長：守崎(会長)

司会：松島(事務局長)

書記：脇(副事務局長) ※後日、録音を確認

会長挨拶

お忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。来年度の年次大会に向けて、事務局を中心にしっかりと準備を進めていただいております。今日の議題にも関連事項が出てくると思いますので、よろしくお願ひします。

審議事項

【1】第53回(2024年度)年次大会関連

1. 事務局

(1) 年次大会の運営について

小西学術局長より、次のような説明があった。2023年度は2019年度以来の4年ぶりの対面開催となったが、年次大会パンフレットとプロシーディングスのデジタルメディア化、それに伴う広告収入体系の変化、オンライン決済の一般化など、従来の対面開催とは異なる点もあった。これらを踏まえて2024年度年次大会の運営について検討の必要がある。

以下は2023年度の仕事の割り振りとなる。

担当	担当内容
会長	大会開催場所の選定及び交渉
学術局	テーマ設定 学術講演者の選定及び交渉 発表応募受付及びスクリーニング(正式決定は締め切り後の理事会) プログラム・プロシーディングス作成 学術賞の準備(賞状・トロフィー) Peatixの設定

広報局	発表募集の告知 (NL、HP、X) ひな形のアップロード プログラム・プロシーディングスのアップロード Peatix を用いた大会申し込みの告知 出版社ブースの対応
事務局	お金の対応 総会準備・運営
会場大学・ 支部	名札作成 当日の受付対応 (金銭授受あり) アルバイト対応 出版社ブース設営 懇親会の運営

このうち「Peatix の設定」はお金が絡むことであり、学術局や大会実行委員ではなく事務局が担当したほうがよいのではないかと提案があった。松島事務局長から次のような回答があった。たしかに大会実行委員 (毎回顔ぶれが変わる) が Peatix のパスワードなどを引き継ぐのは煩雑である。しかし、事務局が担当するかどうかは、会計担当と会員サービス担当 (両名とも欠席) に相談しないと回答できない。事務局内で検討したうえで、後日回答させていただきたい。また、事務局が担当することになっても、大会実行委員 (会計担当) との連携は必要になってくる。審議の結果、「Peatix の設定」の担当については次回理事会にて事務局から回答することになった。

高井理事より、大会会場の担当 (支部) について、ルール化することで安定した運営が可能になるのではないか旨の質問があった。守崎会長からは、「直近の担当から年数が経過している支部に打診する」という方針はあるものの、ルール化して数年先まで固定できる状況にはないと回答があった。

守崎会長より、大会時の出版ブースについて、出展料を無料にしてはどうかとの提案があった。出展料をいただくと出展数の減少=会員との接点減少が懸念されるためである。松本広報局長から、この点についてもワーキンググループ (前回理事会にて承認) で検討するとの回答があった。

會澤東北支部長より、2024 年度年次大会の懇親会について、「開催」の方向で進めてよいかとの質問があった。審議の結果、「開催」で準備を進めることになった。また、懇親会会場 (学内/学外) については、大学院生の負担等も考慮して学内開催を第一候補とすることになった。

(2) 年次大会における企画パネルについて

小西学術局長より、企画案の採用可否結果について、もう少し早く伝達できるようにしたい旨の提案があった。現状のままであれば、採用可否結果は第 3 回理事会後 (3 月) になる。たしかに手続きとしては理事会を経ることが必要だが、応募者の希望があればそのつど可否を審議するかたちをとれないか。そうでないと、企画で招聘する方への依頼が遅くなるなど、企画提案そのものを妨げる状況が生まれかねない。

守崎会長から、企画案は積極的に募集・採用したいので、「企画案については優先して審議可能」旨の文言を募集時点で周知してはどうかとの意見が出された。

審議の結果、「企画案については優先して審議可能」旨をニュースレター等で周知することになった。具体的な文言については学術局に一任し、守崎会長からの承認を得たうえで会員に周知する。

(3) 2024 年度第 53 回年次大会基調講演者について

小西学術局長より、赤坂憲雄氏（学習院大学）に基調講演を依頼する旨の提案があり、審議の結果承認された。

[2] 各局**1. 事務局**

(1) 2023 年度年次大会決算

松島事務局長より、資料にもとづいて年次大会決算の説明があった。収入の部では、多くの方に参加いただいたおかげで予算よりも決算が約 40,000 円上回った。支出の部では、人件費（アルバイト代）が抑えられたことで、予算よりも約 100,000 円下回った。その結果、全体として約 120,000 円の収入超過となった。

このことについて、審議の結果、承認された。

(2) 2024 年度年次大会会場における光熱費について

會澤東北支部長より、来年度年次大会の会場校では教室使用料は無料であるが、光熱費等がかかることである。試算したところ光熱費だけでも 81,000 円であるが、これで準備を進めてもよろしいかどうかであった。松島事務局長から、会場視察（使用教室の数や大きさを決定する）の際に改めて光熱費抑制のアイデアを練ってはどうかとの意見があり、審議の結果、承認された。

(3) 総会はがきのオンライン化について

松島事務局長より、総会はがきオンライン化の提案があった。

◆理由

—総会はがきに記載される個人情報の取り扱いの問題

- ・はがき（返信）にはどうしても個人情報が記載されることになる。
- ・わざわざ保護シートを使って記載箇所を隠す会員もいる。
- ・この数年間で「住所」「押印」といった項目・情報は削除したものの、やはり個人情報保護の観点から不安は残る（今年度は「氏名」「所属」を記載して返信）。

—総会はがきを破棄していない（おそらく）ので保管の問題

- ・総会はがき＝個人情報の管理（保管・処分）について何も取り決めずに現在に至っている。
- ・仮に管理のルールを定めても、その遵守を担当者個人に背負わせるのは危険。

—経費削減

2023 年度、総会ハガキに関する経費

総会ハガキ作成委託 10,000 円

印刷費 8,310 円

送料 34,524 円

合計 52,835 円

— 「オンライン化」の浸透

- ・年次大会登録もオンライン化しており、会員に大きな反発や混乱を招くことはないと思われる。

— 年次大会実行委員の業務簡素化

- ・理事会においても、年次大会の業務確認・整理・引き継ぎ（の混乱）がたびたび議題にあがっている。
- ・大会実行委員と事務局の業務簡素化としても有効。

◆ 新たな出欠確認方法（案）

- ・たとえば、学会の Google アカウントから google form でページを作成し、リンクを ML 等で共有する。

◆ 想定される問題

- ・レスポンスが少なくなり、総会定足数（会則では会員の 5 分の 1 以上）に満たないかもしれない。

審議の結果、総会はがきは 2024 年度からオンライン化することになった。

小西学術局長より、今年度の総会はがき（返信されたもの）をどのように扱えばよいかとの質問があった。松島事務局長から、国際文献社に送付すれば保管してもらえるとの回答があった。

2. 学術局

(1) ジャーナル関係

— 第 52 巻第 2 号について

内藤副学術局長より、査読中であった研究論文 2 本について、修正後掲載可となった旨の説明があった。第 52 巻第 2 号には、修正後の研究論文が 2 本（このうち 1 本が遅れる可能性あり。その場合は 1 本のみ掲載）、第 52 回年次大会関連の基調講演およびシンポジウムの論考が 4 本、掲載予定である。

審議の結果、以上のことについて承認された。

【3】各担当理事

1. 会長選挙について

選挙管理委員の選出について、宮原理事から後日個別に依頼することもあわせて承認された。

報告事項

【1】第53回(2024年度)年次大会関連

1. 学術局

(1) 2024年度年次大会日程

小西学術局長より、来年度年次大会日程について次の説明があった。

日時：2024年6月1日(土)、2日(日)

場所：東北工業大学八木山キャンパス

テーマ：「地域と記憶」

(2) 2024年度大会向けの募集要項

小西学術局長より、来年度年次大会の募集要項について説明があった。募集①～③は今年度と同様であり、応募資格についても今年度と変更はないとのことであった。

募集①「研究発表」：質疑応答を含む30分程度の、論文発表を前提とした研究発表

募集②「パネル発表」：統一テーマについての90～120分程度の研究発表。

募集③「企画セッション」：会員相互の研鑽や情報交換を目的とした90～120分程度の自由企画。形式はパネルディスカッション、ワークショップ、模擬講義など。その他の企画案も可能で、学術局にご相談のこと。

(3) 学会賞(書籍部門)応募について

小西学術局長より、学会賞(書籍部門)の応募について説明があった。

対象：本学会正会員によるオリジナルの著作のうち、過去5年間に応募していないもの。共著・分担執筆作品は、全執筆者がJCA会員でなくともよいが、著作へのJCA会員の貢献が顕著と認められるもの。

締め切り：2023年12月31日(消印有効)

応募資格：JCA正会員(2023年度までの会費を納入していること)

応募方法：審査用の著書3冊、および100字程度の著作概略および著者の名前・連絡先情報(著書の返却はなし)

応募数量：会員一人一冊(自薦、他薦問わず)

問い合わせ先：下記2名に同報送信

学術局長 小西卓三 tkonishi[@を入れる]swu.ac.jp

副学術局長 内藤伊都子 itnaito [@を入れる] ed.tokyo-fukushi.ac.jp

審査書類一式提出先：学術局長 小西卓三

住所：〒154-8533 東京都世田谷区太子堂 1-7-57 昭和女子大学 英語コミュニケーション学科

電話：03-3411-5403

ファックス：03-3411-6404

E-mail: tkonishi[@を入れる]swu.ac.jp

【2】各局

1. 事務局

(1) 入退会者報告

松島事務局長より、会員数は293名（一般会員279名、学生会員13名、準会員1名）であるとの報告があった。

(2) 会費滞納の状況報告

松島事務局長より、会費3年分の滞納者（除籍対象）と会費2年分の滞納者について報告があった。なお、3年滞納者については督促をしたのち会費納入がない場合、除籍となる（例年のスケジュール通り）。

2. 学術局

(1) ジャーナル関係

内藤副学術局長より、次の報告があった。

—第52巻第1号について

2023年7月末に予定通り発行された。

—第52巻第2号の進捗状況について

2024年1月発行予定の第52巻第2号については、修正後の研究論文2本、第52回年次大会の基調講演およびシンポジウムの論考が4本掲載予定である。国際文献社への入稿は、10月末を予定している。

—第53巻第1号への投稿について

2024年7月発行予定の第53巻第1号には、再投稿論文4本、新規投稿論文7本の提出があった。再投稿論文は再査読依頼、新規投稿論文は10月中に査読者を選定し、査読のプロセスを進めていく。

3. 広報局

(1) ニュースレター134号の予定

松本広報局長より、134号（次号）は2023年11月に発行予定との報告があった。

(2) HPへの掲載情報

宮崎副広報局長より、以下の情報が学会HPに掲載された旨の報告があった（前回理事会～2023年10月3日、24件）。

- ・2023年10月03日【ニュース】2023年度JCA関西支部研究会のお知らせ 2023年11月11日（土）
- ・2023年09月21日【ニュース】教員募集のお知らせ（国際基督教大学）2023年10月30日（月）
- ・2023年09月20日【ニュース】電気通信普及財団 2023年度下半期助成・援助公募情報のお知らせ
- ・2023年09月20日【ニュース】会長選挙の告知と候補推薦のお願い
- ・2023年09月14日【ニュース】台風13号で被災されたみなさま

- ・2023年09月13日【ニュース】教員募集のお知らせ（名古屋市立大学大学院）2023年10月16日（月）
- ・2023年09月12日【ニュース】教員募集のお知らせ（東海大学（台湾））2023年10月6日（金）
- ・2023年08月31日【ニュース】中部支部研究会ハイブリッド開催のお知らせ：9月30日（土）15:00～（要申込）
- ・2023年08月24日【ニュース】【受け入れ大学募集開始】2024年度 米国人フルブライト招へい講師プログラム
- ・2023年08月17日【ニュース】多文化関係学会第22回(2023年度)年次大会 開催のお知らせ
- ・2023年08月13日【ニュース】教員募集のお知らせ（西南学院大学）2023年9月28日（金）
- ・2023年08月07日【ニュース】教員募集のお知らせ（福山市立大学）2023年11月10日（金）
- ・2023年08月03日【ニュース】教員募集のお知らせ（立教大学）2023年9月8日（金）
- ・2023年08月02日【ニュース】教員募集のお知らせ（愛知医科大学）期間延長2023年9月15日（金）
- ・2023年07月26日【ニュース】教員募集のお知らせ（武蔵野大学）2023年9月15日（金）
- ・2023年07月18日【ニュース】「2023年度電気通信普及財団賞（第39回）」研究論文・著作等募集のお知らせ
- ・2023年07月17日【ニュース】2023年7月7日からの豪雨により罹災された皆さまへ
- ・2023年06月26日【ニュース】教員募集のお知らせ（青山学院大学）2件
- ・2023年06月11日【ニュース】第52回年次大会のお礼
- ・2023年06月10日【ニュース】教員募集のお知らせ（立命館大学）2023年8月23日
- ・2023年06月02日【ニュース】教員募集のお知らせ（愛知医科大学）2023年7月14日
- ・2023年06月01日【年次大会案内】[updated 6/1] 第52回年次大会「AIとコミュニケーション」2023年6月3日（土）、4日（日）プログラム&プロシーディングス
- ・2023年05月21日【ニュース】ニュースレター133号を発行しました
- ・2023年05月19日【ニュース】教員募集のお知らせ（広島工業大学）2023年9月1日（金）（必着）

(3) ML/Twitterでの情報発信について

松本広報局長より、HP掲載情報のうち、会員向けに共有すべきものに関してはMLにて配信をおこなっている旨の報告があった（前回理事会以後19件）。また、HP掲載情報、およびそれ以外の情報（会員の新刊情報等）を含め、学会公式Twitterをつうじて発信をおこなっているとのことであった（前回理事会以後2件）。

【3】各担当理事

高井企画担当理事より、2023年11月開催のNCAにてJUCAのセッションに参加予定なのだが、何か告知・宣伝ポスターなどがあれば、現地に配布するのでお知らせいただきたいとのことであった。

【4】各支部報告

1. 北海道

佐々木先生（支部長代理）より、支部活動が停滞気味なのでオンラインを活用して立て直しを図りたい旨の報告があった。

2. 東北

會澤東北支部長より、支部創立 30 周年記念の第 1 弾として記念誌を発行したが、第 2 弾として 12 月 2 日（土）に支部研究大会を開催する（Zoom）との報告があった。守崎会長にご講演いただく予定とのことであった。また、現支部長の退職（来春）に向けて次期支部長の選出も行う旨の報告があった。

3. 関東

小西学術局長（支部長代理）より、支部長の任期終了が近づいているので次期支部長について考えなくてはならないとの報告があった。また、年度末に向けて支部大会の開催を検討・調整するとのことであった。

4. 中部

毛利中部支部長より、9 月に例会（ハイブリッド開催）を開催し、「文化から考える団塊世代」というテーマでパネルディスカッションを実施したとの報告があった。3 月にも例会を開催予定だが詳細は未定とのことであった。

5. 関西

守崎会長（支部長代理）より、11 月 11 日（土）に支部大会を開催予定（対面）との報告があった。また、次期支部長の選出も 11 月の支部大会（総会）にて行う予定とのことであった。

6. 中国・四国

谷口中国四国支部長より、今年度支部大会の開催と次期支部長について、引き続き検討したい旨の報告があった。

7. 九州

清宮九州支部長より、九州支部大会が 11 月 25 日（土）に開催予定であるとの報告があった。その周知も兼ねたニュースレターも近日中に発行予定とのことであった。

【5】その他

小西学術局長より、次の報告があった。年次大会でご講演いただいた山口高平先生から、自身が客員教授を務める放送大学の HP に、シンポジウムの概要を掲載してもよいかとの問い合わせがあった。シンポジウムを聞いた放送大学生がその概要を資料にまとめたもので、本学会として問題は見当たらなかったため許可したとのことであった。

松島事務局長より、会員の方からの新刊寄贈（山本真郷・渡邊寧 2023. 『世界の広告クリエイティブを読み解く』 宣伝会議）の報告があった。

引き続き、松島事務局長より、今年度の支部大会助成金・支部活動助成金を申請予定の支部は、今年中（12 月末まで）に申請をお願いしたい旨の報告があった。

【6】次回理事会開催日時・会場

具体的な日程は後日調整。Zoom 開催。

学術局からのお知らせ

ジャーナルに関するお知らせ

2024年1月に『日本コミュニケーション研究』(*Japanese Journal of Communication Studies*)第52巻第2号が発行されました。現在は、第53巻第1号(2024年7月発行予定)の準備が進められています。また、**第53巻第2号(2025年1月発行予定)の原稿を募集**しております。締め切りは、**2024年3月31日(日)**となっております。変更等が生じた際にはホームページに掲載いたしますので、最新情報をご確認のうえご投稿いただきますようお願い申し上げます。

ご投稿の際には、ホームページにある最新の「研究論文集投稿規程」「学会誌執筆要項」をご参照いただき、投稿資格や研究倫理、書式等をご確認のうえ、ご投稿いただけますようお願い申し上げます。ご提出は、ワード等で作成された(1)「論文」、(2)「シノプシス」、(3)「著者情報およびファイル作成に使用した機種等の情報」の3つのファイルをメールに添付して、指定メールアドレスに送付するという形をお願いいたします。また、原稿を送付される際には、ジャーナル専用アドレスに加え、編集委員長のメールアドレスにも「CC:」で送付をお願いいたします。メールアドレスは以下の通りです。

To: journal[@を入れる]mljca1971.com

CC: itnaito[@を入れる]ed.tokyo-fukushi.ac.jp

上述したメール投稿で受領の返信がない等の不具合、また、ジャーナル投稿に関するその他のお問い合わせは、ジャーナル担当の内藤(itnaito[@を入れる]ed.tokyo-fukushi.ac.jp)までご連絡ください。可能な限り迅速に対応致します。

皆様のご投稿を心よりお待ちしております。

(副学術局長：ジャーナル担当 内藤 伊都子)

事務局報告

事務局からのご報告とお願い

1. マイページの利用について

2019年12月から「マイページ」（会員情報管理システム）が利用できるようになりました。マイページの中で「会費納入状況の確認」「会員情報の検索」「会員情報の変更・確認」などができます。新しいHPの右上のバナーからログインできますので、記載内容の確認・登録・更新をお願いいたします。マイページへのアクセスに必要なIDとパスワードは、年会費の請求書といっしょにお送りしております。「お振り込みに関するご注意」の欄に〈マイページのご案内〉がありますのでご覧ください。もしこの用紙を紛失なさった場合には、日本コミュニケーション学会事務局（以下「学会事務局」とする）までお問い合わせください。

問い合わせ先： 日本コミュニケーション学会事務局

jcom-post[@を入れる]as.bunken.co.jp

2. 住所等変更届のお願い

住所や所属が変更になった場合には次のいずれかの方法で手続きをしてください。

- (1) 日本コミュニケーション学会HPにある「マイページ」にアクセスし「会員情報の変更」を選択して必要事項を更新してください。メールアドレスの更新も「会員情報の変更」内で行うことができます。
- (2) 学会事務局までメール、郵送、ファックスのいずれかでご連絡ください。

3. ジャーナルバックナンバー、記念図書ご購入申込みと閲覧・複写申込み

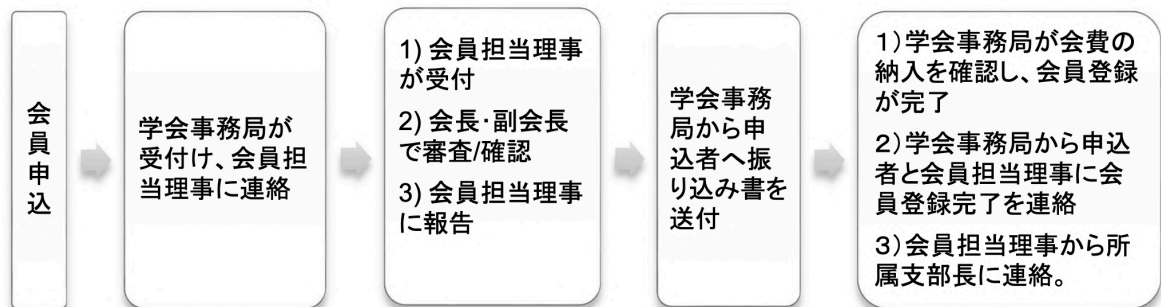
これまで発行されたジャーナルバックナンバーなど学会発刊物をご購入されたい場合は、学会事務局にお問い合わせください。また、科学技術情報発信・流通総合システムJ-STAGE

(<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja/>) あるいは国立情報学研究所の論文情報ナビゲータCiNii (<http://ci.nii.ac.jp/>) やCiNii Research (<https://cir.nii.ac.jp/?lang=ja>) にも論文が掲載されており、閲覧・印刷することができますので、こちらも是非ご利用ください。同サービスを利用せずに複写をご希望の場合は、学会事務局までお問い合わせください。

4. 新規会員の手続き

JCAでは新しい会員を随時受け付けています。次頁のような流れで、新規会員の手続きを行います。ご不明な点がありましたら、学会事務局までご連絡ください。皆様のご協力をお願い申し上げます。皆様のご協力をお願い申し上げます。

【会員申込から会員登録完了までの流れ】



広報局便り

1. 新刊情報提供のお願い

広報局としては、会員の皆様の新刊情報を学会公式 Twitter(@jca_1971)およびMLで発信・配信していきたいと考えております。自薦、他薦を問わず、新刊のご著書に関する情報をお寄せいただきたく、お願い申し上げます。ぜひ、ご検討ください。

※学会ホームページに記載されている「基本方針」に合致しないものに関しては、学会公式 Twitter 等での発信をお断りする場合がございます。ご了承下さい。

<http://jca1971.com/keynote>

2. 広報局からのお知らせ

- ① 広報局では ML をもちいて、学会 HP における掲載情報を中心に会員の皆様あての情報配信をおこなっております。それらが届いているかをご確認いただいたうえで、もし不達の場合には、JCA ニュースレター今号 23 ページのご案内をご参照いただき、マイページへの登録手続き/メールアドレスの更新をお願いいたします。
- ② 広報局では各支部や各研究会の情報、他学会や教員公募などの情報も、ホームページにアップロードしていきたいと考えております。ぜひ、情報をお寄せください。
- ③ 皆様からも、国内だけでなく、海外の学会を含めて関連する講演会や研究会があれば情報として広報局までご一報下さい。ホームページにアップロードしたいと思います。
- ④ ホームページ (<http://jca1971.com/>) は、適宜更新しております。ご意見やご質問を頂ければ幸いです。
- ⑤ JCA 公式 Twitter(@jca_1971)も適宜更新しております。是非フォローをお願いいたします。

(広報局長 松本健太郎)

JCA ニュースレターへのご寄稿のお願い

日本コミュニケーション学会では、ニュースレターへの会員の皆様のご寄稿を募集しております。以下の要領で奮ってご寄稿ください。宛先：今井達也 (imatatsu.jca[@を入れる]gmail.com)

① 著書紹介

会員の皆様の著書を紹介するコーナーです。自薦、他薦を問わず、会員の皆様の著書をご紹介ください。和文・英文で1枚程度（A4）の原稿を受け付けております。

② コラム：コミュニケーション教育

コミュニケーション教育に関する実践報告、事例紹介、展望、論考、その他のエッセイを受け付けています。

和文・英文で1枚程度（A4）の原稿を受け付けております。

③ NL 表紙の写真

ニュースレターの表紙を飾る写真を募集しております。本学会のNL表紙に相応しい写真がございましたら是非お寄せください。（写真は、会員の皆様ご自身でお撮りになったもの、または著作権をお持ちの写真に限ります。また、写真内容が法令に触れないようご配慮ください。）

支部ニュース



東北支部



(支部長 會澤まりえ)

東北支部では、2023年12月2日(土)に東北支部第24回研究大会をオンライン(Zoom)で開催しました。支部創立30周年記念事業の最後として、会長の守崎先生に特別講演を行なっていただきました。会長にご講演いただけましたことは支部会員にとりましても、大変有意義な機会となりました。加えて3つの研究発表があり、その後支部総会を行いました。参加者10名で、詳しくは以下の通りです。

【プログラム】

特別講演：JCA 会長 守崎誠一先生(関西大学)「外国語の運用能力以外に必要なもの ―異文化間コミュニケーション学からみた効果的な異文化間コミュニケーション―」

研究発表1 小島正美・宮曾根美香先生(東北工業大学)「オブジェクト指向コミュニケーションモデル ―コロナ禍における児童・生徒におけるいじめ・不登校対応モデルの構築―」

研究発表2 川内規会先生(青森県立保健大学)「医療現場の多言語サポート体制に関する一考察 ―医療通訳・翻訳アプリの対応から―」

研究発表3 五十嵐紀子先生(新潟医療福祉大学)「動物を介したつながり創出の可能性 ―ペット飼育支援が閉じた扉を開く―」

研究発表後に支部総会を開き、2024年春の支部研究会を2月11日(日)にオンライン(Zoom)で開催することや、人事の件などについて話し合いました。現支部長の會澤が2023年度をもちまして定年退職となるため、新支部長予定者は宮曾根美香先生(東北工業大学)に決定しました。尚、宮曾根

先生は第53回年次大会委員長を務められる予定です。支部会員一丸となって大会運営をサポートしたいと思います。

最後に私事になりますが、本学会に1987年に入会してから36年間、理事、第21回年次大会委員長、初代東北支部長、編集局副局長、副会長等様々な役職を担わせていただきました。退職前に再度東北支部長となり支部創立30周年記念誌の発行や記念事業に携わることができましたのも、皆様のご支援の賜物です。ここにお礼と感謝を申し上げます。退職後ももしばらくは会員として支部活動に参加させていただく予定です。



2023年12月2日(土)に開催された東北支部第24回研究大会



関東支部



(支部長 田島 慎朗)

関東支部では、以下のとおり定例研究会を開催いたします。みなさま、奮ってご参加ください。テーマ：「コミュニケーション学と日本語ラップ」

数十年前米国から輸入されて以来様々なシーンを作り上げてきた日本語ラップは、様々な発話主体に声を与え、日本語リリックの可能性を広げるものとして、今やポピュラー・カルチャーのシーンに欠かせないものになっている。昨今、言語学

や社会学、批評理論（フェミニズム、ポストコロニアリズムなど）といった分野で日本語ラップは注目され、分析、解釈、理解が深められてきた。では、コミュニケーション学は日本語ラップの研究にどのような貢献ができるだろうか。ラップが誕生した米国やその他の英語圏でのコミュニケーション学者によるラップ研究が盛んな一方、日本語ラップの研究はこれから発展する余地が大いにあるトピックである。

今年度の関東支部会研究会では、登壇者の提言をきっかけに、コミュニケーション学と日本語ラップの関係性を考察するきっかけとしたい。

話題提供者：

1. 出口朋美先生（近畿大学）・小坂貴志先生（東京国際大学）

2. 杉原奈南実さん（立教大学大学院）

コメンテーター：青沼智先生（国際基督教大学）

日時：2024年3月30日（土） 10:00-12:00

場所：関西大学東京センター C 教室（東京都千代田区丸の内1丁目7-12 サピアタワー 9F）

参加費：無料

参加申し込み先

<https://forms.gle/QMFuZnbv3irXzg92A>

OR



（申し込み締め切り 3月25日）

関西支部

（支部長 小山 哲春）

関西支部では、2023年度関西支部大会を2023年11月11日（日）に関西大学梅田キャンパスで開催しました。本年度より関西に赴任されました脇忠幸先生（関西学院大学）を講演者としてお招きし、延べ11名の会員・非会員の皆様にご参加いただき、基調講演後の長時間ディスカッション、その後の懇親会も多いに盛り上がり、大変実り多い大会となりました。

【2023年11月11日 度関西支部大会】

14:00-14:20 支部総会

14:30-15:40 講演

15:50-17:00 質疑応答・ディスカッション

【講演者】 脇忠幸先生（関西学院大学ハンズオン・ラーニング・センター）

【講演タイトル】 「高等教育における「学び」とコミュニケーション」

最初に支部総会を開催し、2022年度の事業報告および2023年度事業計画が報告され、出席の支部会員から承認を得ました。引き続き、野島晃子先生より2022年度決算報告および2023年度予算案が報告され、同様に承認を得ました。脇先生の講演では、新設のハンズオン・ラーニング・センターの新しい取り組みについてご紹介いただき、大学教育の現場で本質的に必要とされていること（現在達成できていないこと）を「コミュニケーション」という観点で再考し「教育コミュニケーション」という概念で捉え直す議論が提示いただきました。これを受け、大学教育で達成すべき「コミュニケーション能力」および効果的な「教育コミュニケーション」について活発な議論が行われ、洞察を深める機会となりました。

関西支部では、春期研究会を2024年3月10日（日）にZoomで開催することを（暫定的に）決定いたしました。大会テーマは「機械翻訳機のこれから」とし、特に語学教育における機械翻訳機の扱い方、今後の語学教育そのものの意義など

について発表・議論いただく企画を計画しております。詳細はHP、NL等でご案内いたしますので、皆様是非ご参加ください！

中国・四国支部

(支部長 谷口 直隆)

中国四国支部では、2023年度に特筆すべき活動を行っていません。ひとえに支部長の怠慢によるものです。申し訳ありません。

現在、支部のマンパワーの問題、支部大会への参加者の減少が喫緊の課題だととらえられます。引き続き、持続可能な支部の在り方について、他の支部の活動も参考にしながらボトムアップで考えていきます。支部の内外を問わず、ご意見・ご助言いただければ幸いです。

どうぞよろしくお願いたします。

九州支部

(支部長 清宮 徹)

九州支部は今年めでたく30周年を迎えました。その記念すべき支部大会を、2023年11月25日(土)に、西南学院大学において対面で開催しました。これは2019年以来の久しぶりの対面開催で、会場にお集まりの参加者にオンライン参加者を加えて、活発な議論が行われました。大会テーマを「現代社会の分断とコミュニケーション」として、先般翻訳が刊行された『差別と資本主義：レイシズム・キャンセルカルチャー・ジェンダー不平等』の翻訳者のお二人である眞下弘子先生(西南学院大学外国語学部教授)と伊東未来先生(西南学院大学国際文化学部准教授)に基調講演をいただきました。眞下先生からは右傾化するヨーロッパの政治言説について、伊東先生からは欧米において従来の評価を否定し、銅像などを引き降ろすようなキャンセル・カルチャーを紹介いただき、ご自身のアフリカでのフィールドワークに重ね合わせてご講演いただきました。この基調講演の記録は、来年度発行の『九州コミュニケーション研究』第22号に掲載予定です。これに先立ち4組の研究発表が行われ、とくに大

学院生から2件の発表もあり、貴重な提案や意見交換が行われました。さらに30周年を記念して、3代の支部長(池田理知子先生、吉武正樹先生と司会の清宮)による「九州支部会30周年パネル対談」が開催されました。九州支部の特有性を中心に議論が重ねられ、若手研究者の育成にこれからも力を入れていこうという方向性が示されました。対面開催ならではの懇親会も楽しく過ごし、次の支部大会の構想を共有することができました。

九州支部の活動のもう一つの大きな柱は、支部紀要の発行です。『九州コミュニケーション研究』第21号が2023年12月に発行されました。昨年の支部大会の基調講演である堀内都喜子さんの記録も掲載され、3つの研究論文が発表されています。九州支部ホームページ(<http://kyushu.jca1971.com/>)にて閲覧可能ですので、どうぞご覧ください。九州支部の「ニューズレター」も、年2回のペースで発行していますので、こちら同ホームページからご覧ください。来年度も、会員のみならずとの交流をより積極的に推進して参ります。



伊東未来先生



眞下弘子先生

連絡先

〒162-0801

東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター

日本コミュニケーション学会事務局

Tel: 03-6824-9372

Fax: 03-5227-8631

[jcom-post@\[をを入れる\]bunken.co.jp](mailto:jcom-post@[をを入れる]bunken.co.jp)



マイページ登録のお願い

日本コミュニケーション学会 広報局

1. マイページの利用開始について

マイページでは「会費納入状況の確認」「会員情報の検索」「会員情報の変更・確認」などができます。新しい HP の右上のバナーからログインできますので、**できるだけ早い時期にアクセスしていただき、記載内容の確認・登録・更新をお願いいたします。**マイページへのアクセスに必要な ID とパスワードは、年会費の請求書と一緒に送っております。「お振り込みに関するご注意」の欄に〈マイページのご案内〉がありますのでご覧ください。もしこの用紙を紛失なされた場合には、日本コミュニケーション学会事務局（以下「学会事務局」とする）までお問い合わせください。

問い合わせ先： 日本コミュニケーション学会事務局
jcom-post[@を入れる]bunken.co.jp

2. 住所等変更届のお願い

住所や所属が変更になった場合には次のいずれかの方法で手続きをしてください。

- (1) 日本コミュニケーション学会 HP にある「マイページ」にアクセスし「会員情報の変更」を選択して必要事項を更新してください。メールアドレスの更新も「会員情報の変更」内で行うことができます。
- (2) 学会事務局までメール、郵送、ファックスのいずれかでご連絡ください。

編集後記

令和6年1月1日に発生した能登半島地震により、犠牲となられた方々にお悔やみを申し上げるとともに、被災された全ての方々に心よりお見舞い申し上げます。

令和6年を晴れやかな気分で迎えることは難しい状況でした。日本では能登半島地震が発生したことにより、たくさんの方が悲しみに暮れています。世界ではウクライナやシリア、イエメン、スーダン、そしてパレスチナ・ガザ地区において長く苦しい紛争・戦争が続いています。これら、そしてここに収まりきれない量のその他の悲劇的なイベントにより、人々は分断し、対立が派生しています。学問が「役に立つ・立たない」で語られることが、より身近で行われるようになっていますが、今この状況でコミュニケーション学が役に立てることはなんなのでしょうか。災害時における人と人との対話的なコミュニケーションに目を向けることや、上記のようなイベントが人々の間でどのように語り継がれていくか、を分析することもできるかと思えます。「コミュニケーション学は役に立つ」という語り一辺倒で、この学問の魅力を伝えることは、ある意味間違っていると思えますが、特にこれからこの学問に興味を持ってくれるであろう若い世代に、このような非常事態におけるコミュニケーション学の「立ち振舞い」を見せることは重要なのではと考えています。

広報局 ニュースレター担当 今井 達也